様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３３９１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５３００１２

研究課題名（和文）台湾総督府５０年の再評価－明治期官僚制の側面から－

研究課題名（英文）Revaluation of Taiwan Governor General of Government Fifty Years - From the Aspect of the Meiji Era Bureaucracy -

研究代表者
谷口　昭（TANIGUCHI, AKIRA）

名城大学・法学部・教授

研究者番号：２００２５１５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：台湾総督府による治績を評価するために現地に残る「文物」調査と分析を行った。
「文」は「台湾総督府公文類纂」を基軸とする文書群で、「臨時台湾土地調査局」については292巻の全画像を蒐集し、約50万字の翻刻文を蓄積した。他に「総督府職員録」に基づいて、台湾近代化の原動力となった官員データベース（明治31～昭和3年）を作成し、双方とも公開への途を歩んでいる。
「物」は総督府時代の築造物で、文化財としての古蹟に留まらず、その機能が現在も維持される建物群や当時のインフラである。これらを原住民が保持した慣習を含む歴史空間として追体験しなければ、旧慣調査を含めた治績の再評価は不可能だという認識を得た。

研究成果の概要（英文）：In order to evaluate the achievement by Governor General of Taiwan, I conducted a survey and analysis which is only found locally. "Sentence" is a group of documents centered on "Taiwan Governor General Public Bureau Compilation", of which 292 books of "Temporary Taiwan Land Investigation Bureau" collected all images and accumulated approximately 500,000 letters. In addition, based on the "Government Office Employee Record", I created a government official database (Meiji 31 - Showa 3 years) that became the driving force of modernization of Taiwan, both of which are moving to the public."Things" are buildings of the Governor-General period, which is a building group and the infrastructure of the time, whose function is not limited to historic sites as cultural assets, but that function is still maintained. I realized that it is impossible to reevaluate the results including old-fashioned surveys unless they are relocated as historic spaces including customs held by indigenous people.

研究分野：日本法制史

キーワード：台湾総督府　臨時台湾土地調査局　総督府職員録　台湾の近代化　歴史空間追体験　旧慣調査　原住民の旧慣

１．研究開始当初の背景

(1)　本研究を開始するにあたって直接の背景となったのは、平成 20～23 年度の科学研究費助成事業「台湾総督府文書の研究－台湾近代化の実相に反映した明治官僚制の特質を探る－」(課題番号 20402010　基盤研究(B)海外　研究代表者谷口昭)の成果である。そこでは台湾総督府文書(南投市中興新村・国史館台湾文献館所蔵「公文類纂」)のうち、これまで全貌に触れられたことがない「臨時台湾土地調査局」関係の画像取得と、精選した文書の翻刻・入力を進める過程で、土地政策を基軸とする台湾近代化の実相を追体験し、土地および旧慣の調査に従事した総督府職員の実像に触れることができた。「総督府文書研究の現状と課題」と題して国史館台湾文献館館長を含む 3 名のスタッフを招いた国際研究集会や、同じく台湾大学法律学院教授を招いた近代化をキーワードとする研究会の成果と相俟って、従来、職員の不正や腐敗が強調されがちであった、総督府 50 年の治績に対する評価を転換できる見通しを得た。本研究の一面はその延長線上に位置づけるものであり、さらに拡大・深化させることを目的としたものとなる(図は新装された檔案室)。

(2)　さて、総督府文書の概要については中京大学社会科学研究所編『台湾総督府文書目録』(同編纂委員会、ゆまに書房)の明治・大正編が完成し、国史館台湾文献館を中心に、現地においても劉澤民編『台湾総督府檔案平埔族関係文献選輯』(正・続、2003～4、同館)など、多くの文書画像が公刊されていた。同館をベースとしてたび重なる学術研討会が開催され、筆者も招かれて報告の機会を得たことも本研究への途となっていた。同時に、国立中央図書館台湾分館に架蔵される「総督府旧蹟文書」から「台湾総督府職員録」(発行は台湾日日新報社)その他を踏査し、著名・無名を問わず多くの官員データが分析途上であった。このような、豊富な一次史料というべき文書の存在が本研究開始時の学術上の背景といえる。

(3)　とはいえ実証研究の対象となったもの以外に、総督府時代の台湾について叙された内外の一般書も、歴史空間を形作り表現する意味においては大きな研究の背景を織りなしている。日本による統治期の出版物は別として、意図して禁欲的に避けてきた現代から振り返る台湾と台湾人に関する諸々の著作物には、当時を浮き彫りにする優れた作品が現れていた。衆庶に親しまれた司馬遼太郎『街道をゆく 40 台湾紀行』(1994 年、朝日新聞社)を嚆矢として、それを台湾の恩人と評価する蔡焜燦『台湾人と日本精神　日本人よ胸を張りなさい』(2001 年、小学館文庫)にいたる台湾論－それはそのまま日治時期の日本論になるのだが－、1980 年代後半の自由化以後は刺激的かつ啓蒙的な叙述に触れることができる。
一例を揚げれば、楊威理『ある台湾知識人の悲劇　中国と日本のはざまで 葉盛吉伝』(1993 年、岩波書店)・柯籏化『台湾監獄島』(1992 年、イースト・プレス)・小林よしのり『新・ゴーマニズム宣言　台湾論』(2000 年、小学館)・古川勝三『台湾を愛した日本人　土木技師八田與一の生涯』(2009 年、創風社出版)・藤井省三等編『台湾の「大東亜戦争」』(2002 年、東京大学出版会)など、漫画を含む日台関係の記述があり、それらは山岡淳一郎等『日本人、台湾を拓く　許文龍氏と胸像の物語』(2013 年、まどか出版)・片倉佳史『台湾に生きている「日本」』(2009 年、祥伝社新書)・同『古写真が語る台湾日本統治時代の 50 年』(2015 年、　祥伝社)・森常治『台湾の森於菟』(2013 年、MP ミヤオビパブリッシング)と続く。他方で、周婉窈『増補版図説　台湾の歴史』(濱島敦俊監訳 2013 年、平凡社) ・陳柔縉『日本統治時代の台湾』(天野健太郎訳 2014 年、PHP)・呉密察等審訂『台湾歴史地図』(2015 年、国立台湾歴史博物館等合作)など、日本統治下を含む歴史・地理・通史の集大成を目指す出版物も出現し、本研究の側面的な背景をなしていた。
　これらは浅野和生編著『一八九五－一九四五　日本統治下の台湾　戦後七十年の視座から』(2015 年、展転社)という見方と、門田隆将『汝、ふたつの故国に殉ず －台湾で「英雄」となったある日本人の物語』(2016 年、角川書店)に見えるように、今後も当時の人物や社会の姿が発掘されるであろうことを暗示していた。

２．研究の目的

　台湾総督府の関係文書を精査すると、総督府による多岐にわたる施政内容はもとより、業務に従事した官員(職員)たちの実像が浮かび上がってくる。本研究は、彼らが残した記録をもとに、50 年に及んだ総督府による台湾統治の功罪を摘出し、一概に「帝国主義下の植民地政府」とはいえない施政の実態について再評価を行うことを目的とする。ある者は幕藩制国家の末期に生を受け、多くは明治維新以後の急速な近代化のもとで育った官員たちの出自や性格と、彼らが外地で業務に臨んだ姿勢や資質に視点を据えることによって、外地を媒介とした日本の近代法の展開と、近世に遡る明治期官僚制の特質が浮き彫りになるからである。そのため以下の研究目的を設定した。それは、一世代前に近代化を経験した日本人が台湾の社会構造を変革していく過程を追体験し、太平洋戦争以前の日本と台湾という歴史空間を再現するという願望に基づいている。
(1)　総督府文書の解明　各種「公文類纂」、

とりわけ臨時台湾土地調査局が調査し、土地の所有権を設定して台湾の近代化を進めるために採った施策の実相と手法を追体験して再評価の基軸を創出する。その際、様々な抵抗に会いながらも意欲的に調査した「旧慣(慣習)」の中味と、それらを立法を含む施策へ反映させた総督府の姿勢を文書から読み取ることが必要となる（下図は旧慣調査の目録）。

(2)　統治主体の分析と評価　台湾総督・民政長官（のち局長）を頂点とする総督府首脳部および大学教授等以外に、上記の実地調査に携わった事務官グループと派出所の巡査にいたる官員たちの全体像が求められなければならない。そのため作成途上にあった「職員録」(右図)データベースの一応の完成を目指す。現地に残る「総督府旧蹟文書」に欠けるものについては「明治・大正・昭和　官員録」（国立公文書館蔵）によって補い、可能であれば歴史に埋没した一二の官員の実像に迫る。

(3)　旧慣の分析と歴史空間の体現　総督府文書に収められた慣習についてはもちろん、とくに原住民の世界に残された慣習を分析し、現代台湾への投影を探る。多文化社会を目指す現代台湾において、民事裁判の場でそれらを認める判例が出ているからである。文字史料では感得できない歴史空間を体感するための現地踏査を行う。

(4)　一般書の渉猟　文献・史料および学術書だけでなく、民主化以後に世に出た伝記・小説など、一般的な出版物も本研究の視野に収め、現代から振り返る総督府時代の評価を深める。長く続いた抗日を標榜する戒厳令下では弾圧の危機にさらされ、水面下に漂っていた台湾人の経験と生の声を取り入れるためである。折しも戦前の日本教育で育った「日本語族」を自称する最後の世代の輝きに、人びとの魂の叫びを聞くからである。

３．研究の方法

本研究は「文」「物」を調査し、その結果を分析して総合する方法を採る。その手法は以下の二点に集約される。

(1)　文献・史料の解析　総督府によって集積された各種「公文類纂」「総督府職員録」について、筆者が蒐集し精査したイメージデータと翻刻文に加え、作成した官員データベースをもとに、総督府の治績の再評価に務める。明治官僚制の帰結として稼働した総督府官員制の構造原理と官員の実像を探ることで、初めて彼らの正当な評価に結びつけることになろう。また、この作業には、現代からの視点を容れ、かつ先入観に縛られることを避けながら、台湾について叙述された民主化以後の文献に可能な限り目を通す。本研究のテーマから幾分か逸れることを覚悟しても、つまるところは総督府時代に端を発する台湾人および日本人が如何に生きたか、それぞれの存在形態が描かれているからである。

(2)　歴史空間の踏査　現代台湾には、総督府時代の築造物で、文化財としての古蹟に留まらず、その機能が現在も維持されている建物群や、当時のインフラの跡が数多く残されている。それらは文献史料からは具象化し難い歴史空間を想像させるもので、それらを追体験するため、必要最低限の現地踏査を行う。原住民が保持した慣習の世界を垣間見ることも含めて、総督府による治績の評価に結びつけたい。踏査の結果は、物見遊山の域を超えて本研究を彩るエピソードとなるものと想定できると思われる。

４．研究成果

延長期間を含む本研究の成果を、研究の方法に沿って述べる。膨大な文物については順次ホームページに掲載する。

(1)　「文」の成果　①総督府文書について約 30 万コマの画像データを集積、約 50 万字の翻刻文を完成　②総督府職員録から明治・大正期の全職員(約 3000×25 年分)のデータベースを完成。これにより彼らの出自や職務・職種に加えて現地生活の態様と、内地化が進んだ昭和前半期にいたる経年変化の概観を得た。

(2)　「物」の成果　「物」すなわち歴史空間の探訪は、研究期間中かなり精力的に実施した。台湾各地への踏査の数例と所感を列挙すれば次の通りである。

①澎湖島　北西端の軍事施設の遺構へは猛暑のなか汗だくの強行軍となったが、馬公市には庁舎・警察・郵便局の建物(博物館等として保存されている)が残り、単なる軍事の島という先入観とは別に、職員録末尾に収録される文民の息吹を実感することができた(図は補修

予定の日本軍兵舎跡)。国民党独裁下で抗戦紀念碑などに改変され、また滅失したものが多いなかで、海岸に日本軍上陸地点を示す二三の小碑を残したのは、その侵略を記憶させる意図があったのであろうか。

②阿里山　蜂蜜強奪裁判で現代に残る慣習を認める舞台となった原住民鄒族の生活空間を覗き見た。今もそこで生活を営む人びとの二三世代前の先人たちは、森林資源を求める総督府の要請に応じて阿里の深山に分け入り、紅檜の巨木を伐採したのであろう。搬出のためには急峻な斜面を縫って数多のトンネルを掘り、木材の集積地である嘉義（北門站)まで山岳鉄路を敷設するために汗を流したに違いないことを想起した(図は男子集会所と現地ホテルのメニュー)。

③華南大圳　阿里山の南西はるか彼方に眺望した嘉義の街から台南にいたる華南大圳(平野)をタクシーで走る。荒蕪地を一大穀倉地とした八田與一による烏山頭ダムを目の当たりにし、縦横に走る灌漑水路の一部に足を踏み入れて工事の巨大さに感嘆した。数々の職員宿舎の前に立つと、携わった人びとの息吹と総督府の事業の壮大さを納得することになる。当時の大規模なインフラ整備のうち五指に入る遺産であろう(放水口と宿舎に立つ外代樹夫人像。彼女は夫の殉職後、敗戦による帰国直前、放水路に身を抛った)。

高雄市郊外の製糖所遺跡では新渡戸稲造の胸像に出会い、やはり台湾における殖産事業の歴史的意義を肌身に感じる。

④花蓮と太魯閣　太魯閣族青年の運転する車で原住民の集落を二つ訪問。そこでは流暢な日本語を話すやや年配の女性と、日本人訪問者を歓迎する遣り取りが続いたが、過去の日本統治時代の話にはならなかった。その代わりであろうか、車を提供した案内人は豊田移民村(図は開拓記念碑)という日本人の入植地に向かい、寺廟となっていた神社跡を見せてくれた。ここを訪れる日本人は殆どいないということである(図は太魯閣族の生活空間展示と抗日英雄像)。

⑤宜蘭と台北　宜蘭では治水等、地域インフラの整備に統治の実をあげ、今も当地で高く評価される西郷菊次郎（隆盛息）の治績に触れた。よく保存された庁長舎(上図)に彼も住んだのであろうか。

ここでは省略するが、国史館台湾文献館へのベースとした台中と、その外港に当たる鹿港では兵舎跡を訪ね、日月潭近辺の製茶工場(日本人が興した)、総督府文書に占める割合が多い古都台南および高雄など、南東海岸部を除けば、かなりの地域において歴史空間を辿って知見を得たと思う。

ようやく最終年度になって、これまで意図的に避けていた台北中枢部を歩く必要に迫られることになった。日本の近代化の精華となる総督府(現総統府)・総督官邸(図は現台湾賓館の威容と日本庭園)・国立台湾博物館や官庁街を歴訪すると、丁寧に修復・保存された遺物ではあるが、なお現有の機能を果たしていることに懐かしさを覚えると同時に、現代台湾人の心根に直面する心地が呼び起こされる。文字史料で得られた知見と合わせれば、これらの過去の空間に総督府時代の残照を実感するからであろうか。惜しむらくは数千コマを数える撮影画像をもとに、一書にも二書にもなる総督府時代の歴史空間探訪記の公刊が、文書史料の解明に追われて果たせなったことである。後日を期する次第である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計３　件）
①<u>谷口　昭</u>、台湾における近代化の歴史的前提と現代に残る慣習の研究(1)、名城大学総合研究所紀要、査読無、21 号、2016 年、21-24

②谷口　昭、台湾における近代化の歴史的前提と現代に残る慣習の研究(2)、名城大学総合研究所紀要、査読無、21 号、2016 年、49-55
③松田恵美子、慣習と「近代」研究会についての一報告、名城法学、査読無、65-1・2、2015 年、1-21

〔学会発表〕（計 0　件）

〔図書〕（計 0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://wwwhou1.meijo-u.ac.jp/housei2/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
谷口　昭　（TANIGUCHI Akira）
名城大学・法学部・教授
研究者番号 ：２００２５１５９

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
松田　恵美子（MATSUDA Emiko）
名城大学・法学部・教授
研究者番号：５０２７８３２１

(4)研究協力者
(　　)